第九一冊

東屋

寶 12
881
55

宮城県図書館蔵

宇治十帖貞六

東屋

東の名所や河くとりて書付名とせるも
所々もある歟や東屋はあまやと行ふる雨そそぎ
事花菖蒲又菖蒲八月より九月をかけ事あり
花多はく廿二葉とわかり事花流用之
はくそ山ぬけをもとりはなりはなをかりて山の
者りまてあるうちに思ひいつくんもとくんやうのし
うのさわりてくさうにくきはとうれしはほうそうとて
時せそそそそにうつくしくさを行つて
おつやうさうさうと云はくをたきとく言陸うまくむ
と光の浦舟と乃つ川めせとも波ぐち
うもとのあるやはまり浦島結ちんをさうの結
てそ山のこけのもとにてはれうちにこいつんをくんのそ

かくしもおはせしとや
はゝ人山ゝ山と思へと思入申侍さらしありけるを
彼尼君のもとにもそゝくみ方よの給ひしさ侍なとまて
ひくほのめかしきこせられと　弁尼の事也
まめやかにはんさまるへからしも秘めて
猶んいろはやをいふ也
たゝさまてもみえさせ給へん事とそら行しらるひ
て人のきはとりあへゝいふおまろをあらはしも
只今との御前よりてあらん浮もみえ給しと浮舟
母の物うしをいふ也
かなしまつりは何と絶いり侍るひある　薫君
て浮舟を気ふもへのあふとといふ也
たれ子とてもいかへへいかなさなとあまさこのまゝはも

ひかことゝもはそへつゝあつまさぬさうなれなと
常陸守の先腹の子ともはゝまくわかき当腹のむすめとも
まことあるや
ものおそくにあいたへあはれにもゝくにこのありなひをとて
ものいく　記也
御とくといひ陽成院の有なれし常にてはしる御物り
かとうちつゝてひさしくもて物まつし言将り
志すも御母もえらしまれといふあこれくる君をいひあり
かひなるはさましらるまのめに　先腹当腹の歌子ある
かひすてうき舟をそんこと物といひ陽成るや
とりまたてこそ有ある人をいつとうしともおやはかる
きまえてこそまてありや言もし　浮舟ものゝ子とも同
しにはみえませたてしのうへは母の心つよしとをく

二

まことなるにはしんをいつはりてこそあれ
おもしろきおもひをそへてとかくまよひけるはゝ
きこえけるしやうしとおもひて行人もわかれゆくにつけて
しきをのほりてもとめけるはゝのあやしきまてかなしさに
たちゐにつけてもとかくおもひつゝけてなみたもせき
あへす二三人をみるにつけても　同しくもそのへんなるを
くれなゐのゆへにはゝのことはりをおもひしるにつけてや
わかなくもなきひとをなかめやりたる　こゝろかな
こゝろありつきたるもの
今はわか身をいとほしみてまことにあはれとおもふ
きさらきのすゑつかたのことなりけるとかや
いやしきものもかくれありとてすゑたのみて
こゝろのうちをしられたるは人もあるまし　一部をさのことく

かひなき人のなかれたるも一家のまゝ
こゝろあるうちにもあらそひて　うらみなきも
ほとゝきすのなきてもひとりゐたるのちにこそ
さらにものおもひなきすゑにまたなく
わかれしかはあやしうなけくことのうちにひとり
たちならひてみるにゆくへもしらぬそのなかれをみせ
思ひかけぬこともなくしてなれにしみやこをいてゝ
うらみしもの人しれすちりて
好事者募以銭帛　孝経
そのこゝろさしをたつねて　詞のおもむきを
うちゆくとてやつしたるものをたつねけるも
ちきりあるとおもひてつゝまれぬものなれとも
かゝるちかひもなく　家々にあるものはかしこにおもひて

あくや
いとまなくもとめたまふ心もかり　金銀のたくはへも
まことなるたからとおもひつなむたからんともとむるものも
かくしさかりにこそ金のみちもとをよりきとゝもしん
いとふくふくあつなかれしこさわるまじといわん
かしてもとちれかたちや
いさほひよひかされてよれよる人ともほとひかしそく
おかき海ハえあしかとくの人にかくこうしん達たる者かね
てあらそや　あまた物欲なとよきものもあるやまれ
まづ文物欲あるもとや
うちえんとしまるゆくかんくるしう行そひかちり
このめるを　庚申まつる事や
こゝろさう此天てらち　むまあとゝもそのまゝ

天道ものもとハ人のいふまゝも
らうしもとこそ貴人之れちうちさんいかんしうまう
あとかくなからにいひすしてけをはかしおほく
中に　嫁ぬ上らう出でそえ人これうちさへ人すれば也
たくとしおねとてとし廿二三とうとれあともなく心をも
まめやうにかくおりやいふうち人をゆうされた道と
さうしう海あつてあとハえぬるぬすやうとひ
我るとこも手にそていとり仏んそうまいひまうやとなり
ことたらぬ人あつくるしとかんしたりそ道にすりて
うすひある所をもとたくしるも
山さうて天あまくとう海るをいふ人くれ中にとら天そうん
かうともめやもそうや仏ハらくまゐりて物をひしつぬへうまう
そん也かあるなり　まれやほめたる絹也

もすりとまきらてとくしなさそうにあるあ
つとさいてきつのようしとうそく　さいへと
ひんしうもくれあるんをふそんるやいへともむ
こあと身ぬまーさと云俊也さいへとあそんる
ぬといへとも云心也
こつはうにとうとつきてはるんなれはうくはあーささ
ゆよあるせさをなるる　浦毎よあるすさやあるも
ひとりは思ひまうをてうこそはうにおるひるん
ともあはは命とゆうてうつるさあうられめてた
さとんつさあもはうにあるとはるも思へ
人おーとそひたちて八月ろうとはちきりてあう
ととまうけそれさはうそひものとやさをてもはすす
ともふやうはうーうまうさあらそんのうあやうるいて

色まうさうとてんあるはとこのはうんたとうーー
てとうのとうれなあをすたとてんはをはうこをすく
ちとんーーはそこちあはとものもれんはてう
そうはうちとはたとうありめてるーんをつめを
そはうふはーはつそうとみそこと心その師とてはい
けうはうれるうとうはしうーはうにもひとう
ものるれも師とたちるははうこあうはうしひろーとと
はあるー　四教坊は楽人の有所也たるのはうそそ
にたーとも琵琶引名房教坊第一部也とあるも四
教坊つるも和漢不楽人のはるあとは四教坊也
ちとんたり
ぼむたうにをてさうく　山のやまにつこうねうるも
ちやうあ教ちくるとーーあーーをはうーーなタ

若あるときに、ものをてあるべき時を後にはくまれば
行こうの御しさまてさもそうに物めしてうと
そのりうのうちこの物　えやさ楽の曲や光と
あく御寄ひとつもにひく時を言陸なるこ
とおもしろし
うえいこしもとそこ元はをそこ物のゆへをりていと
ひんこうこそこそこんもとのふりへしこうぬとあこことこと
ひおもし行ってうとはもまうこうこ寄と　あこをわう
ることうこもあことい若ひとうをう同服のむこめ
なれとも浮あをとはこ大事あして言陸ありこうひ
てもうけたうむをめとおうとうこうあてこの
あこうこあうことたなとこのありこうぬとあ
とうこもしるも

かくてうのお待ちうこうはとまちつひこあの
なうこうこせのうれこわうう思ひいうこうこも
いとはくまうこうこのむうまうこうこれとおもひてこう
めうもとうこうこそんこうこうこのこきそこにうこうこひこをそ
こうこ海よ海の月こうこひこうこれるれわる花月こう
こうの海こうはこうこあうこうこうこうこうこうこ
ひこうこうこけこうこんこうこうこのこ行
とおやおとおこ海こうこ海こうこうこうこうこうこ
ておこうこうこうこうこうこうこうこうこ
海こうこうこんこ

なの文のうこはこうこおこうこうこ
海こうこ

こうこ死こうこあこうこ海れとこうこ
とこうこひゆこうこまてこうこ海こうこ

世中とかくはもしろからぬにさと物語にもいひしかり
めつらしき文は色を海とやすくうりにはなつかしましきとまは
さぬ人あるこしとかはまつは心をも人にもかなしいへらるへ
まかするすんある人こそやいひなる紙　かの繪姿と
ともはまくおもきとえんはつきて思ふまちなるを
とのつらんやもくて有とや
おねの見はまくて思ふまんとかをかにたくしる
はしらするぬもしめるをはしたにきれこもまて給には
らんとつかすやとすんなるはつるよるするなれと
人とのも有をとりたる心もしてやそいるまてでんみもよ
かくなみんあるへきよるともあるいやまくうひめること
をはなん有るやの語をまいてとれくしくありてくるしく
もまるを語をはる　名もきあしう　文のまより

てなれるすをおねやすく氣色とそこなりひたるや
女ともろきる語をするもけくおほせとはるへきしめ給
しに　中たちのいとうや浮舟にはるさまてきさ
しとなちらにいひしことや
なりにのしはくむまそめとのこ宇文給ましなさゐすまて其
とこて思ひ語へつまことくの子やまへてんとこともとひ
宇文給しなりはりなるもちから心ともとく拾く物まふ
るするくへのかれしうき語くなとくしきくなれて
とをやんと何かしくつなはと宇文給しうきいそてうなる
んのことはさんりくさんくともされとの語をもしるん
名氣色ん　まおもなると云縁也　おねのいひるすと
中しらちにかいすや
なりなちき見へ語つりやそうまにしきやたしにうかひさ

ぬれはをはまつさるのやとをとこ　　ゆふ
みくやもに　　うちし　　ゆきかくれぬる
見いてとはるあやうあるぬ　　はあくさやうれあるとりいき
うよう　　ようなるかあてあるやうとうぬんも
人のかくゆるさぬとうれとやうれとみくそと
うあるまうまうまてはうあてうちそれり
おねあとのあてあて更はのむとになるるいんのゆう
さねるるれとあせやうれるみくそとも
罪くしてうんあうとはあまうちくあはとて
もうあのあはくうんをつしひあんいひうんいさ
もてあうあてうちうにわさまうるれ罪
とはうくしてもうにあをひをとも
源が紙をさあうさあうとあうけうとたうそうおはて

そていうんようとをはくくうをうをあさあくまし
らうんあといとんをなうるんさやのはみ　　はをも
さ陸ううん服うむうも
はんはいうあうとうてはうんのはあく　　中あ
らうようあはいやうあはうあるも
うをとはくうちはくうこうをうさうあうさうあ思それも
はまうんしてハはうはくこうあうこうあうとまう
ん　をうも
まうとにうをうむをあとはのはさしまうはうあうあて
をうをもしうはくんはくんうるにあうをあんは元
とてうをいてうあうしうあうはうはなうやあいさやも
しはんうもをうつひよあ原るうとをさてえいうんしそ
うてはあをさはをはうはのあはれんうをも

拾くしをやとるゝ人のなれをうとみてやうかし
しうの人をうかゝひてこひうらめしるゝ也　常陸ち
寄拾くしをあつろはゆくやうろこをすん
さんとうるゝ也
うらうらかゝるちれをくれそうん女の祈ひをす
これおてようんをうんあとねうくやをくえりをし
されとさひしうをうちあらぬ　わたらはちる神也
うやひ　陶器（セヒ）　をうう
このうれんのそてくハ拾さくをなくうあをんを
をやはしあしぬをとんをとををくうくうあをを
あくうくうて空中をとくくさんうとを祈うひやうくにあく
うををとうくうひてさをとゆるたくさあくハはうくさ
をやの結　常陸ちゆる神也

きとを仮也
ひんををいとをのこうあれはくふあるあらに
蝶のるを蝶れをあのはよりはるをてる
ををるを也あうはうハ浮舟也
うははうあををれはうくんくれとうくにをくん
くくをとんくををあをうををいををうを
うれたうをうまんをいさくをくうをくうん
とをくをはうをとにを時くををハををををけをま
ををををひをてぬんうをなるをひあうハあくんとる海
はうくくくくさくをくをれと　常陸ちう神也
ををれか將度のはをうをくにくあんさくうあをといを
をくれをあひたうかくくくをひくをけをるうれてちう
れうををいをうやくくをくをくをやをくくくをくくくくを神也

此月はうちの御方にせうそこ聞えさせ給ふとはゆる
しあそて此月の御あそび契りのことさせ給ふと御らるさ日
をさへらひをいひしらとおほえて給ふお殿人のやしなひ
やうまうとに水すれ法さくに給ふまへとうんの夜のほむ
もめ母は給ふをは見てらちれおりしまえんな世れ文
えなさんるつひそらんやおんもうらけれはむらにかり
給ふやうの君達ハたくさくしれ君のことくさひし
つさなりてにさるをたてるも思ひあつひうろつこなし
每れうるさくさなんほうの帝給ましし給人へくこそのし
給ふかるとさはるふその御給ひをあるなりちなるやう
にそ給さくうをくまた給ちて帝おとつると宮おりしつ
よろさんことしそんおうろへこさよしとおすんでもふそくるさ
かまさへくゆきまさ給ふられもそ是くとおほしまつるひ

てうんとうめるるをたてこそうとくうんへたうしろとこと
本のとやうさんまそこへ給へるな法給はしとえつらひや
てやのこそしもめやしも　そうへさ懐思也
うしろ見んと給をやまさんまあり給さんとえつらひや
てや姫とおり給へるはあり給ちんや云也
所るまさとへ給しはてんとのみ事きこ給ひうれハまと
の心さしのまゝにやさてあさゝすれともあまさこあらんはたなるを
ゆるひ給さくつとう給し見さうん　おゐのなやむさし
給ましにあさな給ともあまさ給ひしまにはゆるし給へとや
法ないきみてまゐてこと給ひもつれてとゆすなうて所うにうく御
はせうそこ給ふうしくうりてとみ給ひさとたん用しうらんに
思ふ給人名人るれとようし女房ろ人数多給てさうしつら女房に
給まくそよ給人おつふほとにてさるまのとも見とさんとひ已

常にかくしるしおかせ給へることもくちはてさせ給ひしかの
ことに給はん時のうちにいとゞおもはん給ふ事ありけるとも心うく
給ひける事をおもふにもおもふことはりなり常の御事を志
つね給ひけり常にさそはせ給ふとうけ給はりてゆく年
清くとはしるべき給ひけれはとられたるもやかてかのもかはらぬ
あまさの中にてこれをあはん命のあらむとおもひ給ふに
の給ふ人もくるしきとてもあらぬ世のへ人これを心にはとめてあるべし
え給ふにさらに中々むかしのことをおほしめしやりてかへんのさまうれしとそ
思ひいでさせて事ともなくしてうらみそこうろやかになりくるを
見る人もとまんと思ふかれしそおもひたる人のあるをおもはる度は
をさなくてかの大将殿の御事もよくわすれまうしはへりける
まうしこしかのこにはかなくなりにし　こ大将の大将
の親也誰ともなし

いとこころやすくにはかなくまかりにけりと思ひけるにつきて云ひ
出てしかと　さやうにきく　すへき事や
さる程にもるる所まうちはへにさてもうしくし給
をり給ふ又常陸の守か給ひけるをたまへは選なる　始めつの
御事をもらして見ると云り
年比の程よう為くしてを給ふと給ひてさん身をもて
うまつりぬさとう給はんさしの御ゆかりかな成くならし
まうせてもまかせんいやまもれるまれと月比の御心を
そのやうに人の云ひ給へてんとをとあるんと云ひ給へる
さもありてと思ひし御やかにあり給へ　はかなきことの
かしのなるや
よろしきをありけるやうにしくとふたたえなりとおほしなく
かくてあそ給しを　　蝶の詞也

うつほ物かたりに年まへひとりの法師ゆるしたまへんと祈りひお
ほしていたきをなくうしたるぬ事よふたりの法ともえん
しちのおやの云ん事とありてひとりて経てんなくに
そなたのをやはでかまれきやうの法かきハかんらん
なかのひとへ言は色ゆるしをおもきのむ経つる人から
ハつとやんことなくおほく色々わかちの見たり
あるも
常陸の守の子をなれるおほけき八
かうりそうそらんとこりはかりさハまうちとこと
しるしうなしぬなり
わうき見たちとてきもれくしをいそひくともあり
まきは世の大経をいとよく思ふも経つの女をは子
くをいとおほく得て又比ころのはらくなかれやうあれ
と
ともうつしかくしなやうなれと経し経事し

思ほく宮のへとのゆるへきんと嫉のほかわくなし
弄花
桃園の神とあり　死孤露也思ふことのやうに難り
ふるかもなし
とのつくしやむことなき人の法事にひろありつるやうる
そくうちのよとらかもみとふかめきうきなひゆかれまうちも
侍り　物のやうかすゝとへ人のかきかなまふとゝきやうなし
君つき法ひ母そまたり給へんとなり
ら八年四位ありし給ひなんこそひの法八　四位ゝ
ありて後は家は蔵人頭なとこそひなりと嫉ぬなり
ふうひなく思ふとの法くちはうらこそ給へるなり
思ふとちうきは給へしきたりやなりこうち経かと云んなりいひ
こうち給ひやてともちとゐなし
ま經つのすりなへひうかの給ふのめとゝまれるきたるき

やうなる人さんそうそうつとまうをよん世ゆにを
ゆ[illegible]ゆきたるふわをやをいつをそうをにあ〜あをてん
とうを作らるたなれあふこと〜をそく山ゆをかんとる
ををそうく〜はうまつう給ふなるゆんをくゆうを
ゆうさ〜にわをとく〜をあんあり〜まんあるあう〜
人のゆうをとうさう給ふ行をはたちなん
こそよう〜ゆんろうこの母ゆうをなをくゆをなをしん
と所く〜給るれをうに志つ〜なるゆををひゆう〜
はうさ海あをはは〜をうあん　約信

おねうをとゆつの兵衛や
う給〜あれを　年元ゆう

うれたくうろやををるをはをあうをいとあか
くうをにいひはくうれよいを濃まく〜をるひうろう

みくうちをうつあうを
可給ゆをとやを云後や
広うろのゆをくあをとうゆをあうくんるゆなのあひを
仕う〜命給ん加とハいう〜あをさけをうてん給ん
なくあうをとゆうあをとうれをくきをとひあうをして
はうをまうりゆう〜つをものうをれをうを拾あ〜海雨く
ひをあれあくををうをさをうあ〜をうをくあをとをか
はく給をとを志ゆをさをうにをひをめうを拾うゆう
おねやうをくさゆをめのるや
たくまゆりゆ給〜くうををうをを行うく大臣のをうあを
ををめんとれは〜給うひをくゆををなをたをうを拾をを
はくさをんとを給をんにるをををのゆをすを〜をうを〜ゆみ
くををうゆうゆ月を〜給みるれハゆをうを八ゆををあるを

ましられぬの御そはめもなたらかしうめてたくかうたるなめるを
さいはひ人なるかなとおもふ哀とおもひきこえたまふ
時々はかう紛しくまかりて　かねのそはめも見むとて
めのとさへいとあらまほしきさまとおもひめくらさんに
人ゑみまけひすらんや
いまゝとあるもうらむる事ことゝもおもへは　中君の
いとゝかなしきも心をぬる也
あるさまもよりはうちそのかたのひかるゝすをいとゝもくは
きかふめてたしとさひく女のまたは　浮舟の母君の
ことにもゆかぬ也
是もとし　かねのこと也
ひきすゝむくそ我をかた女給へとみくうしきうちそゝて
女の給へり　常陸かうひやうとてすて田舎ひとの

とてあらしつらひ給ふ也
大臣はおほんそくらうとそうんあきもたまらぬを
ろくしなとゝて又かさあり　續勞古記ニ
大權大納言去年獻ニ續勞ヲ申官ニとそくたくさ
出しく官をとめるあらたまるも也是も常陸かい
ひろう給りおとろくしきるすとそ也
ちくうの守はたらくもおほしけや　常陸の守
まかりひるとかねの同也
ちの心さしいとふ思ひえしめ給へるんよいかなるきみん
まいとなくしきねもたちやうにとりなすらん
さおしんいさやとおほしあゆるをひきのこと
めのとかおほんもとおかねさりやましひろる也
なにかときるもの姫君をといつとやむことなき人は

云ひしつきなり給なるを　常陸のむすめのあるす

とよみし云也

大中臣のよしかねも年をおとなひ給ふとかゝるしき

ことに思ひしそあさはかと云ひまかきそやさしれあるな

思ひ給ふ世の也　浮舟ハわれはくれむすめの姉にて

ちゝもおとなひしる様なりつゝ妻をあつかひたるは

しるしてしかくし給へと浮舟のことをおもひ

して云也

月はさも又なくよのはかなしくつくやのひたちの

つらきことにかくあらんとこへとも給ひとかき

つまへはゝしと思ふれへ命はてくつくしこそとも

かくつくすきのたしきるをとしそ世いとやうくしそ

なるまてひとつて名れを見るたいまちつらくち

さりましかれあそおもりしらしめある

ふの宮にゆくもてきこえはおもはするとえんさより　見る比時

みかたハ人しれぬ事いそぎたちて人くのはらそくせさ

おもふつらひあるとすくしらふ給ふ様ハるとそとう

らあしらいをとこるとはくろひあま見るにおねるといつかと

かへりみるんとおしくあるしきにゆるとまやおや

はさくまつおもひさち給ハましくへおもひまゐらす

つきたにされとも大将殿の御給へんさ御をおほさるく

ともあとうそ思ひたくはらなりしされとうちくまさ

そうくさへはつのやとときさハ宮の子ともさひさらん

常陸の宮のあくハなるたとへ人の子なるや

又さちらを男さんへ人をもとおもしいんさひあへきこそ

出しえれあと思ひはしもつくハせん　　八宮の歌

子ゆへともおもはれといひし浮よの様すもしらぬか
えもいはぬをゝんを八宮の御はらにてなかとひしお
とらへきとや母のいひおけるなるや
はりもれ給ふんをあはれしうやしうはゆやもれ給
ゆへのかく給んくるまの給ひけるとあとむひとつりうひ
さるむつをたまうちられかへとよくいひてはなは女房
ましてもとりされきるすやわらん河をとおさてとおもと
へも心あえあしるといひそうしきにこなたあとんのと
くたあしき...もそくめなあらくにくるやとよりとり
きてなりくとゆとこはりはとなくかひつまて給
とゆひへて給　そとより文さてなりくやとく
こかりもなくいひはくるや
はくのはもとはしくいとうもりんとし給ゆるうおほけとなく

心のさたまれるに　　殿もとかくさうまう給へへと浮舟
のまへうえうんとせし...たるや小方よりひとく殿や
めてくうんはてのむもとめをとハすしせさ給えたら
はしいやしまもとやうあんちすかりしうか女こそとこ
てかやしうと給の給ふめま　小方のめてあるに
はむともめられともそれをいさまてとえちあら
しとまちうひおもはやちすふりしうき女房なとそ
いやしなまのすし給へとまとや　小まれさうくてそ
うくとひくうくそらはされと
給ひさうとくくうるや
もとくなへのしとてかうさ夜へといひすり給あへうまれ
え　小将はへあしとてかのむてみとゝとねはあへさ
かとにおもするをハとといひくそえなきの浮まうとゆ

あらしてをとあやしくはるもゆくすゑとも
ようひはくるも
行くすゑくもやこひくるあんたくいのこゝろゆくすゑ
あとあやしうはるくるくの思ふんはをきぬくな
ていひらくるもと　あつまるた　行くもなく
はるくしさ幼とるも　玄奥
ものあるそれあるものといふもくとくるとと思ふりそれ
幼うきとるもくるね滅もれ行ちぬくるとるひはくきれ
てやとこうこあなこたるにはるたいとらうた
をみくるはるるにはるとしくみるとと行くるとと
いこひるくさしものくるるるとと心うき拾ハ人のんるるとを
り　とるるとあるん　ふるくるとと思ふるとくし
しるるくるも

とのれハはるるくとあるひあるくふるもこゝろ元のゆるり
とこるるんくんのをとあるやをを命とともゆるるはくくくそこくお
やるくとやメはるるはるるくくまくさあるさなくくるりあくね
くんとはるくくそくくをいひなるくくくやかくゆくくちる
くあるくるるにはくくくくくやこひぬをとくれくくあと
くくくくくく

いつかのとしとしたちくしのうえにいとくやまし
るなたにうゑられもしさいそひみくさをつるのとしたに
ほ舟つきのうまうありてくさやしんもさそう
ぬるのとめのとわまりれるよ之也
かくんにわかくくくくくあるえをけるくしあ海と
もしたくくしたくまくわうえとはいそをあり物そひさう
あるんんみくくそ尺をきくくさ物くそれたねるこの清さ
まくくちつかのうに尺をもうしまさとしいのちれつる心ち
つくはくう姫はうもたくさやくくはるあやはけもくやく
きうをてあ物くまり移くくとつくをあるみおそろくやん
ついつとさけくくはあかろをもうんんいまくし尺くく
とのはくくは右のたとれはやちちの大納そ或ア尺のうあか
をついとく移んうろはのめくくはるれとやるくく

尺うとのはくくつさしをめをとをはるはいくそうの
人うまめやうにはるはさん　たのたとれは文雪あを
ちた納そはくうくくのたは納そ或ア尺はけろあの文
とは源氏乃清書也
彼母宮ちとのはうくふあくやてはくくを尺んとはるし
ぐくちんそれたくきためてたふはけうとそれともい
ともしてくうるくさるあり　女三文ア宮はうはや
て時くく尺んくんあほけくくもしちん
文のとうくさいくもひんくとやくくれとくのはるあうくを
にはるくくくくとくれいいうふをくくふくくふんんろ
尺くくそのやくくくそのくくはくくあるくくんんろ
てとくうつものこうのはうくはるはいくくくしをめてた
くはくくうあうをくくうくをくんくをあをはくうくしくく

ゆうをはらうもの

中務つるや

このいとゝいつゝひなく結るくさ毎あるさんられと

常陸ちうるや

ゆくさあるもむさんに二心をゆれとられしんやをそて年ころ

をとをすゝつるをり打るとゝ一のんさんうやうにあつき

やうたくまいなれとゝそあゝそれあけうゝくうう

めゝさもゝとるゝめるようちいさうひくゝをゆり

あるあるをとはけきゝめけ上をアみたちみくゝやつゝん

う心をうゝゝをゝんのはけるゝとゝをわり教あう

てをうひわゝゝを法けのうゝとうあうゝやをうとゝゝん

きをうつうれゝゝくゝそのゝてまつれとゝあゝて

人をゝんあゝををそてをゝんとうゝゝ毎うゝをいそ

きたちて女房あゝゝこなゝさにうやをゝれあゝゝけるゝを

ゆ結をけゝゝを行ゝ

うき舟のゝにすれ女房ゝ

のあるをけゝくゝうひをゝて山ひゝうれをゝけ

らを行ゝとや

やうて恨あゝとゝあゝゝうゝてゝらをゝをれゝくゝを

ゝゝあゝにゝうみゝれいゝとわゝゝとくあゝゝあむま

しゝとて　末下ゝゝゝゝうき舟の月をゝうゝとゝわゝさ

ゝて今ゝてゝあるや

あのゝうにきて今ゝちるゝとうゝゝゝうゝひゝさゝくゝやすれ

恨ゝうゝさゝゝゝにあゝゝとくけるゝゝさゝうゝゝをゝるゝて

ゝうと　うき舟のゝゝゝゝゝゝゝゝんゝとゝるや

ゝうゝゝに　ゝゝうゝゝとゝんや

屏風ゝゝゝゝてきゝてゝうをゝまゝてたくゝありめて

みぐいあとあやしきまでそしらてくしろてくしろとやうていそをと
ゝ小なる月ゝくくれとゝちいまゝくやうひくゝうゝ
さまゝ月ゝくくいとゝ小おれてよゝるゝ　ほ舟ゝるゝ
人ゝ清心さんゝゝとさてゝ　ゝゝあゝ行ゝゝるゝれいたゝ
ゝゝいとゝくゝさゝひゝれゝ落ゝゝとゝて思ゝるほゝ

吉陸小ゝゝといまゝ振ゝゝ
さゝゝゝゝふゝゝゝゝ

やうなれとさうく丸あのうふを知つきるなれとあのふれ
まれはもとに清文きりる　中元人きり
そうるもとはつて いなれくしをやとうこまりて
とひはるまいはもやのこさせぬを　もとうの頃也
はしもへさるもはりてまうにうつさてんとはもひ
はるたいと思ひくさまひ行ひぬへなるれつうる
さうついもとくうはしをもん数ぬ月ひと
つのけようれをあつを表なるるのこはれくはるを
まれをそのもしなるにまんるんとうちなりて
うもうる文と表と丸ひられと　中元の
表と丸はるも
あるのさうるとゆるしはうてやうにしへとあひと
月はりてうるうしはんとはまくみかく

はるさうはくさふはうきんとまうはうかすてき
んうを心うるうへうれもとなはまなくてうさ
丸にうはるもをれへの清をあへ丸うあるる
をれはさとおはるはうる　はうあるうとる
かうて中元をほ自はうはんを八の
うやのはうあ丸うるはくはうはうる
をはうるもはいと心うあはけよいひやられも
中元はうはうるを女房やひやるとうるやうひ
はうをあるも
はうるやうをそはうるへうをうたるをとかの行
はをそうあおるはれへのはなにまるとあつと
よのつるはうなりはまるといとるうけなくの行はを
くるやあとやをそはうのあるうにうろへさ

[illegible]

[illegible]

てんしゅをいてそのうちにはうらうとも　うさ舟つるも

のはあるらんとおもひつゝまゐりてゆくんなれハ中

くうあるものをとのつてさうるをうきゝと思ひうきかね

つゝつゝひとゝゝそうるをめてたまゝとをせんとゝつたに

のさゝくしうるへさとゝもゝとゝねゝ心よハたくわゝうゝる

あつるゝさぬきとをゝまうゝてうゝてけくゝひ紙を

ゝをゝきてゝうんゝうゝひいそゝのゝうゝとゝゝるきゝるゝと

ハゝゝきゝとゝいゝとゝうゝゝゝ

つぎ人をたゆへてあるほどに中宮ちゆし
行つゝとゝもにのれうちよりて
めのとゝ[illegible]人ゝ[illegible]二三人[illegible]
かよまりてゝ[illegible]をゝ[illegible]
二条院みゝ宰相とゝれたる所也
やゝこゝろうゝ[illegible]
ひとなれゝある時ハ[illegible]
中宮恥給ぬ也　宰相の母ゝ
つゝあゝ[illegible]
ひゝて[illegible]
あり[illegible]
中宮の[illegible]
[illegible]

しゝてゝ人あいるつゝ[illegible]
もつひゝあをあちゝ[illegible]
母あをかゝねと[illegible]
の[illegible]
ゝあ[illegible]
宰相の[illegible]
[illegible]
[illegible]
中宮のやゝとも[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行ものとなるとくしさんのいらるとかくしてうけと
とうひありぬるハ　　常陸うもとのるもや
わうむをめとうやうにて　　ちくんさんようくらい
しうしつまうひとあのうて　　常陸うあの寄る
と行ても
ちくのしつ　　ちくらうるもや
后みとるてんとおもひたるんくわうこあうう寄ん
ひうるうれとうつとるとうとうねを心ちたくはう
ふうるとうもや和ひとよ　　常陸ハ后みとと思うう
行のしうむをめつ中ひとも寄うひうにうしあう
とうよとうとうねうと行ものうとうんしやうう舟ウ
るうと安れうつも
あうまうくうとうひはくまうう面　　めれとくかうも

文日方のて行ものなるてうさとうひウ文まうのうやまうく
しうるうと寄うんしうて行ひううくあとうしうるうか
ちうひゆうしうえうてのうをもうう行ウうるはく
うひ行ンるうくあう紹たうくをうくあひ行つうさよ
うひうくわう文とうウんもて行うてひうひうん行う
ゆうくうひあと寄うてうくうたうと出行ウ寄うさよ
つと寄うてうくうひのうくにやうくひうるんくうくそ
寄うて物あと中のもたうにうくをううてあてうこ
とうて人のをうさうしうるうくうるうをうてた
ちうて行あうあうと行ううんうくうるふとをうしめとうれ
うこのをうくうつうこのをこれおれあ　　もうう三京ウ
院ウ女房方ねのうううさとめうるうもか將武安
なうあに太刀とうくう為也

[illegible]

うた舟のるや

[illegible]

つまこ生也

[illegible]

でぬ術なり

いさ山ぢはるるとの人をうけてとい[illegible]れえたるよ

つをすくさくたるもつかをとのうちつみ

浮舟うはきそるる人をいそ陸をるくるもうた

もちをてをくるあるかを孤なる

[illegible]

おねとあやをれかとくこひあるかをにとるる

るるるへうるとをひくいとくしをあるるるくれ

もひるりぬるるえのるるひをそ[illegible]をれはをるるのそ

ををるるをうちるれをるるをうるをるるをるるをるるを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひさせたまへるとうけたまはれさきもくせあるこんを
おもひあくがれとも
くちおしくもこひめえのおもうにまさんにあるこそ
ほうあるまうれあるとうちなげつゝやのめえをとうちうば
ゆくゑをやれはあるそきおもくあるこもまさうあるあまをハ
をとこのこゝろをとひなくさめはつさわをあるこをいめ
をそのこゝやしくうつけともふとゝ迷ふを中く
よろつひうをとひなくされあるあんをまをもをうにを
をさしあるゑなをゝ心をはつさせんゝをこそ
先八のえをと母えのうをを中えの行ひ出して母
えハあををせををにハえををあさをして為行
しうあるをにをひあるをされて為を姉えをゝ
おもひをして為をせををいあるをををいあるをを

たのゝ絵つゝをとにんのうをゝぬをとうを人ゝ流う
らあ清心のゝをゝとあをにつををとをそ口おゝ
くれとの絵人を大将屋をさをゝをゝ学ふををゝる
をををて為ををのうはゝふあ用ゝあるに心をを
ををし絵をんうゝおうをゝをををゝなゝ絵をのる
をうををををををゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
姉えのおををゝをゝをとをを美人をを二えをのゝをゝ
絵をはゝてをうれゝをを絵をゝをゝをゝ心絵をゝる
きをををおのゝをゝをゝをゝをゝ

いをゝや　流あの母ゝを云あをゝを中えのゝ絵をを
やゝをおとゝんをゝをれなる心をゝをゝをゝなゝゝく
をゝやゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
ゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ

なまて物を見さしたこゝろのはかなさとそひやり
あるくうつゝのこゝろをもとゝ心うかりしうか
ふり給ふ　　帰京と函と同様の物語とゝ
たゝ人をさそふ也　帰京の乃ち稚乃ち乃ちて給ふね
をんなくるまてうたれたる也
うつゝのこゝろにはうそとに見くるとんと　　浦毎の
こゝのうつゝ也
こゝ数なるあんとさんうんの弁此尼天の弁の給ひ
あるさまやとゝ給へるゝ事みを給へるゝねと
ひとゝもとゆつてそをつとゝをるけもやはは
ゝれよるん思つ給へしあるゝ
　　をゝ一本四つよりをゝ
はゝのゝさなる物あとゝいふはてそうしたゝ天とゝそうつ

ゝるゝなくくゝるゝ所ゝうにをゝはゝねとゝんとを
ゝをとゝをたゝお侍ゝ思ひわるゝはゝ者ゝさゝ所ゝるとゝの
めゝて給はゝんゝゝゝとハなにゝ物々乃ちくさえ
ゝさにて見をくしはゝへゝゝち稚侍るんはゝ八ゝさに
なゝさ所ゝうちゝゝひはゝんゝあるゝさに
　　函なくゝあゝて物とゝ云後也
尼はゝて者ゝ尼ゝ
をゝて侍ゝまゝ者ゝ
ゝゝ侍ゝとゝんゝひ行へゝひくハ行ゝひ
ゝれとゝ行ゝんゝゝあるゝ者ゝ侍ゝ稚を
　　をふむゝゝゝ　　中天の初也
ゝやうにゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝさなゝとゝれゝ　　さゝ函乃字也ゝゝゝゝゝゝ

やうなれと有和とも
ひきふそのかるにかもひとりてゆくうしかもよ
つほうふなるゝ物れと　中天家はるのやへ人
つゆ跡りもつけてと　ちぬやうれ物もと四ろう
かうあうたるやも
まいていとあるまゝさはとるやつゆるんとい
とかゝまたるはさ海りてあといとかとものく
のゆくと毎さゝいとうまゝとさひるゝと祈ひあるゆ
ちるなれとうなるゝぬさ海てきゝをたう
ほ舟の毋つるや
いるくこしをたみるるん物ちあ八乃ころうゝ
やのはゝう情なくおほすもかちをるもにいるく
人きなくくあとちるつゝ物ゆれとうやのゝさを

ちゆるをゝうあくまつきてをたんいめゝへのうさとる
くさゝはるるとくゝはの地ろう　田舎乃物語也
うさ語の義なりしちとゝやゝ　光ゝ山
のゝゝに物ゝ時はゝうの物のうたゆるつるめゝるや義
ハもてあそ物ゝをちゆうみゝ作さはのゝてなれも
ちゆれなるゝもと有人ゝ
はゝ海のまつゝうゝるゝうきてゝのゝるゝ毋ゝ
市陸奥ゝをちゆまゝとゝれハゝるゝのうゝさゆるゝとゝゝあひ
たゝもつのゝゝにくゝるゝとゝあゝ地ゝうゝる人ゝ
毋乃ひゝとゝのゝゝひちゆゝるゝ人ゝとるゝ
ゝゝ中ハ若ゝうゝやゝうゝるゝとゝん毋乃ひゝつのたゝゝるゝ
大ゝゝ代毋乃ひゝつゝるゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うやゝの毋ゝあゝとゝつゝゝとゝゝひゝるゝくゝゝゝゝ人ゝと

なるらしと云るも
はくそ山のきはとくあさましかりしかとも
はるもいとうるてさかりもまさりて
まとうしにさうらぬあやしれはとにそち
さそれはしんさんはふんはるくしをそ
あく　常陸のくにとうらもとうらせてうくあ
るあくへしとも
はくそ山そ山をかけ
うはとのあはすとやりもくちはしこ
のあんはうあるやうあもとひしるくと
常陸のふあくるのとはトれ知也
山そへはくまうをやくさきをてうとはしあとうこ

さうこうれた　山そ
きふのくあはしてとはうとのとはし
中そのくはのくあはしてあしせるはも
かくちもんさあとそあくむまうらうそをちうはの
ちちはとはくしうははうさうあいあるはう
遊玄なる山也　巨海の巨の字也はやうるくも
かとあくもちくさのくあくあとくうく
まてあはう　一とくあるも
はあとくひうとむくのくはあはあはまて
あはくしをうてそはやうれくもとははくりの
せをくくやとうちひいそのの
はうしとはあ辰をうはとくやはまくはの字九性
ひさはくうひくんはうひとこのまくくとのそくそて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きにおろかなるこころひやうとあるにたがふべんとこそ
ひいつくしやうし侍ふ　石の文あるを猶作りて文のは
うらとまりとをこそ侍るべかるべき也
文八四日のさうそく侍めることを人をきてたくみ侍ぬ
しかるあるひときいつる物侍りとなつかしきに世のこと
ことにあまたこそくいつゝ人の三きとうるくいれるの
をあるうちにたるこゝとにたいひるさてうをめ
うをこゝ侍ふさこゝをいてうせとをくゆるれきとの
こゝはあこんなとにさうこゝたりひそめてこゝとれを
ちるれを名ぶなこゝ世をすやあとをのこゝ行へと
人のにさこゝあきこゝるれ物なこゝれをんてゆくまうに
衰なるにあるこゝさまをと出来をこゝねをゆをこゝるう
らこゝのこゝのふことをあるをきた

人班未石苔宵情　白氏文集

いとをうとなくこゝちをけこゝ　中元の心地蓋
乃侍やこゝまをおはこゝれをいとをうなれをす
とこゝちをけこゝ侍やこゝ
こゝにはこゝとやこゝるみこゝをこゝとせこゝ物をこゝまこゝるこゝく
ゆをとはをこゝあやわこゝん
蓋やこゝやこゝをこゝにはこゝふやこゝ心後神こゝゆをこゝとをけこゝる水
はこゝこゝとをもてこゝはこゝとやこゝるこゝみこゝをやをこゝとこゝ
彼はこゝとこゝこゝ侍ひこゝてこゝいてこゝとをこゝひこゝこゝれこゝとこゝに
あこゝんとはこゝのこゝこゝこゝすこゝ侍こゝふこゝと　こゝ舟こゝる蓋
こゝこゝこゝと侍こゝ也
こゝをこゝをこゝくこゝれこゝゆこゝちこゝをこゝゆこゝこゝをこゝにこゝ
れこゝとこゝちこゝはこゝきこゝにこゝをこゝこゝんこゝちこゝをこゝをこゝて

やそのむかふ行くひとそそうとうしめ
いてやを物とをさんへある河やわう行くひのこと
をかくこそそうくハうしめ時くくこ行
やまくおるのうくハ中くこ行はあるとみくく
山おろうのとをくうたんはようにうくへくしとや
うやくくんやまくくハなくくこあるとをみくへく
との行くこいそくくこうくてうはひくと思やとはの
たくうくひ行くとおくくくうやめ　末丁ち
なれを者をこ物くくうやくこ行くとや
いそちくそはくくへくてさを行へくこれ
さくはかをるのん形をとくくへ行くくとや
海のうれとをくこそうひくうをもゆくくをとの行
てをみるくくこくこ

中天はその行くひくくくくく中天をのう
きんとくくくくこの行くをくへくあくの天る行
てくくくくくこくくくくく

うもとはるれいはうみはそんぶうとも
むくてあまさにとゑやいとわかくそはやとの所よ
中ゑの須也女二ゑこまこなさうのさ引よ
あまくさあくいとわかきとも物ゑとの所也
大めさのひくてあまさひめあまいとゑそたのまはう
はせよまれセハはくまりや
大めさとゑみてそたて流まてもつみにうせ流てみ
いとう物くれ也やうゑ物みれあそたにもあくそひ物
れ　時稚川のみ
うもさくまはくはくゑくくはうくと
歌くてのはみやひあくあとゑあとと
うれなうさあくゑあてはみてさとそう
宿毎とゑあうひあそをて我中ゑへのそひと

はくくくくにくはくはは仕まあくあくられたを
をくくくくゑひのなあとくくとうかあうさ
角くなてはといひひるれはくくはくはくは
さそうはくてまとそうやををくくはくは
くくくう草花の所也
くくてなくはむへさくとそのみはくたるへをあやし
をうあさそれはくうとそのみはくたるへをあやし
角とくくんとはくくまくくく　宿毎のみくう
そ色にをてはくくはやくくんと蓋とう
らへうゑくゑもはくくはくくはくく

たゝせのひく　たゝしまやと落舟つるゝと舟ひく
わたせ川と中元人　蓮の中路初也
ち〻そなをゐるまゝ　うゝてゝて　くゝゐゐく
わしゝゝゝぬやうに行くゝ也
つとうゐくゝ色ゐゝ　ひゐくゝ行るゐハ行るゐとた
うゐゐゝさまゝてちんとゆくゝひゐくゝとゐてらて
行ゐるに　ぬ色のうゝれうゐくゝゝさゐ何
るゐもゐこうゐゝゝ花ゐまゝて春とゐゐゐつるゐ
とゐ行ゐ也
代毎元つとゐてたくゝゐゐやうるゐ法ゐ稚れとゐてく
ゐれとゆくゐとうに行ゐもひゐりてゝひくゝひゐるゐ
と行るゐゝゝさるゐに　ゆくゐとゝハ
ゐゝこと元ゐうゝ行ゐゐゝ蓮ゝとゝひゝと

ゐゐゝさゝに　ひゝれとゝひゝゐ毎の月て彦
星ゐゝくゐゝゐゝゐ　ゐゐをたゐゐゐ
代は彦撰と月ゐゐに〻ゐゐ川とゐゐりてゝく
彦星れゝりとゝゝ行ゐを行ゐをゐ　おゝ
七夕や元ゝゐ女のこなゝにゝ川ゐりゝくゝ七夕
とゝゐゐと元ゐ元ゐ天河と時ゐゐとゐて
彦星れゝくゝんゐ　ん行ゐゐゐ七
夕と元〻女七夕ゐゐ彦星と元〻男七夕ゐ
や元ゐゐ　彦星ゐ　走ゐまゐゐとゐ天河ゐる
ゐる実ゐ今ハやゐてよ
ゐゐひゐゐゐゐゐゐんゐよ月をんハ行ゐゐ
ゐ行ゐゐゐゐゐゐ

[illegible]

時く　[illegible]

[illegible]

くくくつもくれたること[illegible]

[illegible]

[illegible]

若有人聞是法華王善薩本事品能隨喜讃嘆

者是人現世口中常出牛頭栴檀の香　法花経法華王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うの歌　　藤ひらの朝臣

母をはのうり歌

ちはやぶるかみのいかきに神さびてうゑしうゑしの花の
さかりをみるかな　　中務のみこ

おもかげにたちかはるとも藤の花
なれしかをだにとめてこそみ

きたにて今は宵板をとりはなちてこの
ちをとりてとりの世とをもひたちぬ
わかんをもわかるることにこひてこ
せの歌人　　女二宮

つゆとなれとかるる世とをむなしくて
と中宮のうせ給ひ給ひ　　母の歌
はるかめの月をは　　元もの母の歌
人をわかるるこゝろ　　心ゆくしさ
うんをもわかるこひ歌人のこゝ

板をとひとの月をうつしたるこゝろはくの歌
あとをとくこゝろ歌人の歌　　母の歌
ひかぬ人しらてわかれ　　ひとハ心をなくなる
歌　　母の歌
なくて月はかんたるこゝろ　　みしうこゝ
歌　　ひとの歌
なを後のせまてうつ　　歌人
こひ歌　　ひとの心
そて歌　　せこ歌人
我年ゆたかなる方に　　ゆき
月は心をはるかに　　ゆくこゝ
いとをつくしてこゝ　　中宮
の歌　　元の母の歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

活舟の母車也

えらちらそうして移ふ力の天あり人多くあり

行ひられし母ひらるさ海うて　中元の力の天

と見て系こせて此を岸にて多く出る也

車をとも也いたして切りまたよさわひく

月う天とあり力うたく切りめして是くは

出ある級て車をも常にめこぬやりまてさ

活車にめして物移也

をこうてたくられし　えそちめれ車也

移うに活車すをてれ移ふその車そこう

こ紙りいうれつるハとめこ絵さ移ふやう

けてそ母ひこ活にあ度い活るうこ活んうこひな

物ほうう移もしく活ひこ度のまうてこさを

移ふとやもてうたうあ活せんともこ活つそ

活さやうるれとひこ移ふ紙此のもをふこうる

乃方れ活とやとうれくこ

ひるる此ふこ活と移うもうもなれと云心

うわさやうるれとう白天つ活作のんてうこ明也

うをくこ　月うられある方れ程と出て

く活母れ母こ也

方これ活このうをこ入ゆんうそとのこ也ふく

しくあうまりり也こ天こ常るまりてうこ也

うこ舟也

な紙くこ也屋りしてれんうる心ふんくあさ

うを也こひうぬこ移ひて紙こちこのといふ

人やこにうう移ふ心ある移ゆうをにいこ

出つる車をひきとどめてとかくして乃てしは
まことに行はるべきうひてのはつ雪めづらしと
きこゆるにおぼしてい　中務
ら〳〵間安き〳〵うちうちしたる
をゆるとうわくてはたらもたちひろこゆる
人をことにいとめでたくもとゆへくし
をみしものはひたすられ人の雪をつくりてとと
のゝ常にとりちいはるこそ　中務乃白雪
ゆきはやめ〳〵はるるもいかゝ房はたゆうわる
白てのあるちをいひ雪をゆうと
まちをいとめ〳〵はつるをゆうと
くし〳〵にの雪ひるたと服たちはるを
なにをそそとうちそひまはつもらうあ

きに行〳〵
いつかはとあめとのもとをはたらたてたる
ひるはもまつはるとのもとのまつ
四月はかへしまつ夜よりはらに人〳〵あるまつ
ことさはなりやとみもとわてはたはるれ
と心ちをはてたのたとはるたちをとう
ちわんとはたをつあるひはつゆはるこ
こなさにはるこせ行へまは
むもそれはるあもとあるもはるとみもや
女房ちはゆもはのはもとはるけも
はるもはるるや　沐　ひかるや
人〳〵もとのくうちやもはるはるはるあはは人
もちはちはるはるはるはるはるあるはるはるはは

ゆるされぬとてこそ人をうらめ　ちくさ
やなりあんと　ものこゝろへを　さひくてなり給
むくと中天へ白雲すりはらあるや
きにはかつまさぬひくりくにてそこ海せあや
しう　いはもいはひくくにもうたるとも
月はもものうくせ給くく　久しくあくをを
行くぬをはうくあ勢行とも
くるとは月をりもとの　今日をくくへ
はは月をすれはもの花や
九十月はうてくあて　はくまつくせつる紙と
九月十月をくさぬ月とくるや
をゆいとはくく
うに給ををゆはは中天とはくくるとも

ゆくえもを祈給つりをれたをさにられをあるか
とあるく　わくえのくくりをあくくるあくる時
分にくわ給へをたなくるくや
変はたくもくありき給てあくれくにをへぬ
月くはのをしあるれ海糸りあるれと岸くを
ちくのくを給ふなくの初とるるちくしのはそ給ふ
あきたるくるとのをへをちくしのあるくに一をくる
をを初ぬさまて屏風たてありそれはくに九性
をにをへくくをてたり　時簾りをくくて
立たるまや
くるをくひとへをうちくけて出はんをれをれやうな
名にををくへくれをとはとみあるくさるりて泄く
ちくくをくくと　本十八一をわくはなるをとす

さうしひろげてみるに
屏風のひとつにたくさんにかれあるうち四めをあつめて
ゆゑあるべし　思の外なるみゆる四めをんなしむこと
とうぬりみゆるも
今年のうちにはかりうぬなりなりやはりてこのひさ
しにうつしたりとていとをんなそうにとりかくや
とうあるこうとかつて　うちわりうぬ
よりたとえばあるさはにはかりさとかつそにあり
うぬさうなるも
人さうも　浦舟を沖をたつぬも
こなるのらうれたりのはかせんさへうとかりうを
くにさうれうれあるやうあれわるれいたるお
ほとりとかりうれたちうくうひみてなるむ

おるうあるとあさたるちうとともうやと
けけてひやう姫のはうちうのそかかよるあるたん
ひもうけもきにこなさにきるれたるくうやはう
年とおひくあさけうるとあるやうたへいとかう
しうみあるに思ふうはんをもくしかさてきぬの
もそとうくへかりてこうのされうはうもそうく
かうく屏風のたきあるよあかりひぬあやうとうひて
扇とさうかくしてんうるたるさあいとおう
あうさとうもをあううくへかりてそれそあのう
そそゆうくれとのかりむくつをくうりぬ
いつやくかうるもかりそううきるもも
ちうあのうはうふうかとかはよるてうくしあいてとさ
うあひかりへきた

ていあてそうかとまてそうくゝ行也
こゝろそゝくあゝ行のゆくゝ行ゆくん大ねゆや
浮舟葦ゆくゝまゝまゝ行くとゝひゝゝゝ
ゆうゝゝおけゝゝひゝとゝとゝひゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

行ものあるなるさ海ちかきうらに
れ波ときこゆあてはるくるの海はるとも
かくしかのうのゝ行へもやてうつみられさうしひと
まもうあをたるを　浮舟のまゝもせとて
ゆくちはとをうきあとも
たをとてそゆふもをめれさつゝ海さてうしお
うゝてうにはるくなるやうはるくやうさあはと
おあはるくはるゝ者わとゝはるゝ
いそさ寄りてやうにはるよとて波ふわくうに
あとあはるくはるゝやはゝ
はるくゝと寄りてやうにさはるゝさとも
歌のとちこゆやうはるくゝとわはひくこのはゝ勢
わそうゝなんとゝはるやとゝれや

よむや
そやうにあそれんあくゝ波ゆゝんゝにいと
あやゝさゝとはるにはるんはるゝてるんえうこ
さはゝてゝんはるそやてさうるとうにうち
きそうゝうゝ男れてとうゝうゝてそひゆ
はるゝ波ゆゝのそうゝうゝ海とうひゆとう
うう　白波あくまゝゝはるとうるゝ
女の心あゝを波ゆゝうゝなゝとゝうゝあゝは
ゆふいとはるゝはるゝとあゝはれたをはいうゝう
ゆゝうんゝと寄りてゆゝおゝそはゝひくゆゝうゝを
めとゝそうゝとあさゝうゝくゝうゝに波をくく
ゝんゝと　あくゝんはうゝれるゝはゝはるゝ
なるゝとゝみるくゝゝも

あるやうにあさましくおぼえて
さひとうれしかりなんとうひはるそ
ぬをいとさとうへくれ今年うめはあさみつ
と思ひあくはなさわてやいひくいひうゝ
ひつさるものをしらてをまてをるさねや
たゝ分つうちぬさうをいとわゝれて
情ありてうゝ行　あはいてくいつさるを
ゆはあひゝうゝ心やさねとをあをうにをる
いとわゝさにとさへたるやはしゝ行さるや
古道うへうをくゝそ物いとわゝくう
にあをゆをうんと安ゆをハれいの四うれは様うを
うれさゝをいつにあをくゝまゝうぬさ海よ思
ひ行うんとをうんうゝうやをくとをくゝひ番

はるあをいとわゝくあはせとゝてやをうん
うをんくゝををうゝやうにうさはうをて
行なくあやゝをんの中くをうれをゝてえ
ひゝうをまうひうんと流まゝさにあをいれ
行うに上をアあまうを行日あくはうをひた
をうれあハ出いをうあ時をとくくをうを行
へをみるうちをやをうゝそう　行を
やうれ清超あるる時ハをくく白をこなを
へをうを行行うあををうんをとをくく
出うちをけてやをゝたうや也
ちくをいふをんなるやをうれめれとをあまゝ
うをそれを　わをそうゝと同や　同言也
はをうひあてまをうをひををうれうをと

つるくこそひたりはきとかねとそうしていと
わりあれはとに四ちうの人をあつめて大臣このたまれよ
ゐ山もなやまを引とそ今ハ月ゝくゝなく
なやまをわりゝちうさに
か侍ゐ中ゐの女房やゐ　ほとに　いとわりう
あるひとに四ゐ裏ちうの大臣のちうやゐの若衆
四ちう
たゐ四ちうにわりのちうやゐ中ゐ郎やゐこさせんとて
四　白ゐちうはあちうんちうにわとんとまつゐ
ぬるちうれとうやうにいひをゝたり
かねてや今ハうひなくゐあゐいとゐとうちう
ゐ山まるとおわひやうゝやゐ引そやうとうるゐ
たちうゐとなちうけとゐさゝめぶうちうと

たゐとされとにひうちうよさうや
ゐ　中ゐちうす　白ゐちうゐ中ゐ引ちうけうちうや
いとさゝゐくさんちうゐ中ゐ引ゐあれもゝゝむ
あちうんをわちうのちうとさゝゐんうとゐ
ゐ　白ゐねちうあうさんちうちうれんとや
ゐちうてゐはひちうゐすゐとゐ今ゐゝあちうく
しゐにゐなをハうゐあちうゐ引ちうさうあちうぬゐゝ
さに中ゐゐちうあちうゐ引ゐちうくゝあひやう
ゐとの引ハゐれて宮れさうひゐ中ゐゝれゐけは
ねとちうんなのちうはちうゐやゐあて引ちうんとの
いとうちうとちうくゝわちうさゐんめゐもあ引さゐゐあちうん
ゐたちうゐくゝこちうはつうひとああちうてあくうとうて
ちうさはちうんゐちうちうて　ほ舟ちうちう引ゐ

ちくさひろく白玉の中なるやうにうつや
すつさはる　白宮の内母屋女房へ上つきた
おんなの事也
中務はかたくこそ侍なれ　今上のはゝ也
大夫ハたゝいはるゝみちに　中宮の大夫也
御車をとゞめ出る人侍りけるに
あやしき物かたりくしもとゝ侍りけるに人のあは
きくんとゝもたくさんなくゝ
なりてとをきて出給ふ行そうさゆめれさあるふち
してはをふとゝ記さてあるつゝれとうち
あつさあるしてうゝ侍はそうゝ侍りつを
てはきうひんなうゝ
あはしるゝ侍ふ事侍ふ
なるゝあるあそうゝや侍る

きんと中ものとゝもやをうゝ女房侍ハとあちゝ
なるゝんしよ者つさしきるれそうん人りそう
とゝ侍りとゝもえくさ侍行ゝあんさゝとうゝ
つるゝるゝやをひ行ゝ
えをうつ是ていとゝはゝ
あゝ侍りてゝとつゝ
はゝ海りありいゝたゝ
なゝ人のをゝたゝて
はゝ

あるくゝ記
ゝ侍ふうやをうてゝはゝ侍ふるゝとうゝ
然侍り　常陸ゝもゝのるゝ
をつゝ侍ふをゝ
ゝ侍ふひゝ侍ひうたくひゝはのゝ
とゝ侍ありゝひ侍ゝとハ侍りゝを

たりまうこのあたをかほどのさたひなれとうと
とかくしきりてゆくしたかるきとんちへきくい
とかくうけも　芝居の行ひとくきるにはしを
おそうさ舟れ舟をいとかいとあいかるくやはく行この
をんくさかねの天そいとあいかるくやはく行この
ちとかたちきうちくやをうたもつき
るはかりくかとあうたにこはつまくにくお
たまたくきまのをあとうちるけまはくいふ
浮舟つるや
天をたくとハとかくとひやうくされを
浮舟れ舟や
をくふうをくあるくしぬあとうるに
をんくをいふはをくをんとをつにはくれも

白雲とれるの中をのつんにかほをくんとうひまるを
うかつ命てなさかいとくかつとあつうひ
てあふくうかををくかをせぬんくををつあま
うかるうるんくれをのあほくさちなんくい
やくちかくれとさうるんくをくにうくまれ
んまをハうれをいと屋をかくもしまち
かひてんふかをくつをちうををけせの飯
きかりまかハ衣とをひやすく行りんをくぬ
ちをたひくををつてまをてかをくと
初雪人ぞく雪かるや
人つくあるはうさ海をのくをひやすくあるぞかくも
春をうやををつくれちさいをひかりまをやくを
初人しかをを

と今はけるとも
ひろ夫人ハ人ゝとゝろれあるくやゝ行なんやとせとやと
きにひわるゝとゝあちいそゝて出行ものも
白女内妻へ参り行やも
うちゝうれかゝるやあゝん　内妻ゝゝゝゝゝれは
つゝと出行ゝゝゝ舟のわゝゝゝゝゝゆるゝも
こなゝゝの月ゝゝゝゝて行ゝゝ物の行ゝ参ゝゝゝゝ
いゝとあてゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てとくとひよ殿へらまと殿ふ仕ひとうれてなく
さむこうちてひそまたにうんそてんとなれあり
むうれ清四さ〜れやうにあもほうさていとうまく
うんあとうこうひ殿へとあはけ〜まうて
姫君のことくとひうう殿へ
まさむうひうる四りいくんすうんとうもうてふく
しうひてとうあたにのこうひやすこさをにうみを
ま仕るいうにるをとなくさむ四ちゆてうんとも
うとひてとうひたるうもあくいふ絵あとうと出さ
てたとりうと紫ふ殿ぜて月殿ふにむうひくあて
ちもえ〜わへ殿ふ四まつあて月殿ふるはうけさ
らふこうやみあるこうろたなくうに殿ふにわ〜をうう
記ふひうさまうれ殿ふりたる四ちていとあはう

なあはけてさ殿たくうれとのこうひ出〜角まもも
ちうこうみあもとくあ殿ふていとあなうんのうち
れふてうこうしもあ殿ふあうわうん殿宮にはもよ
くに殿ふうたるあうう殿ふこ姫君八宮れたうさ
四りあうあ殿ふ仕殿ふうたるもうてあるんうを
ふありしうをにみうあくんを出ふうあ殿ふありを
月とあ殿ふうあるに源くうて月殿ふうれいうき
りあくはあにあうさう殿れあうう殿ふうたくう
にあうさうあうてあまくとあまもこたるはふ
のう殿ふへうにうて元八まうてあうれうあく
くうふう殿ふはうとはけまくのこうひうる
いあにうくちてうあくくうあれもう殿
はうくうう殿ふるあうとあくう月とく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もゝ張りんやうなる

人のはるものいと物思ふ
をとこ尺ばかりしたるめれと車ひく
うゝくやうにもゆきさくくもそゝ
ぬらすにひとりんさうゝ
うゝもちれ物めくこゝろ
のゝ心ゝひよわをゝ
たゝりぬ夫おりまさ
く心ゆさうけなる人と
をゝせとさてうゝ
をゝしのゝゆくゝをなゝ
物ゝうやゝ　物祝ゝ
てゝるゝを

あてゝもれ
ゝハ上臈ゝもゝぬ物よ

いゝちれゝゆんやうなる
乃流れゝとゝいゝちゝ
んゝゝくゝゝをゝ
いゝちの物ゝん心ちゝ
とゝゝ有てんとゝ
れと云常陸乃介
ゝくゝゝう心さゝ
て心ゆゝくゝて我
らぬ物ゝゝよのも
ゝをとゝて侍ゝる
ゝうぬものゝゝに
海舟れゝを心ゝゝ
くゝゝなゝ物ゝ

ゝ張ゝ
ゝ
ゝ

みてこうしゐるやや

ことさいかさりのあさうけさにハあしさあるとこう
あかるるをに々しさとたる　浦あとそれ行こ

へさあさあさあを行しぬ始とやや
ゆまうけしそうしうしうそれとてうしひ行る

いしちやいかさまてその行の初や　はまうけ
いさちハんとうくあや
こそうしうしうそれ

色こくまうけをさ行物やうさ舟乃元といさ
ちよそこるにつきて中れ考よ初とこ行
やうるそしおのあるをまうけこそうしう
それと中天の行つとあ天の学るもわれハ
ふのああこうしくこひ始とや　元る話
ふこうしをなるゆまうこと心乃ああこひ

うしくそあ行ゆ教いうふあ行しんとこうこと
うちふて学こもかてさいうひ行ふいうこうのね
うひこ行ふちしあんのまうゆ学ん始しんをうあやこれ
もこしこさこにちんこうひ行ふるこさこうにはし
ましさこにちんふ始あるあ行ふのはいこみさ行
ちんふ始ふさとこうちるこをいとくわうて
ふ学ふ山あもうくさこうやと思ふ々常ふ者とや
みさかハ常任ちるふ山や
うこ行ふのうこうあうしゆ行つさこてこうく
あをこうこくしをこひこうちゆうしハこそあうけ
しうこ行たちてようこぬんの時くゆ一行ふれと
白文の行あるまひうこ行つるや
そのふこをみるんかうこたれて行こうひしてひんふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をんなをなうらうるに
ちるのくしうらは八四人殺あるんとも
はるゆうるを心うをやこの
ゆるに乙ん女なるをとも
　　八文あるよりてちるとあるほとにはあらう
へひつひとあるを心うくれともうれ舟とんのまく
をせんとてもつひうるに白ゑつあるさはたく
られをて乙んをれるをも出来らをんをとうある
ゑくとも
あちさのゑ屋とやうあうとをもくとんをとうを
世はをてあうを野よとのつうくをもくもはう
まうつてんとみひをきてみつくくはうをうちんを
三条の森れるをも

えつうらるれて世をあらんをあるあをと思
ひくひ行つるちをひをき表や　母の思うんした
ゑをを浦舟うるのくくををうをうをつを
わやうをまをて行くをれをはうるて
をつくをんるさんをひはるくををうたをたつを
て人舟をあらくくをこをれんをもんうやをうを
ならをとうり　浦舟八親のんはくをうるをを表や
をつ親をえまをてうさ舟をあくくわく
思つやうにみるをんをとををとを
四ちるくあをとはうくぬんのあくをたちやをを
ひのまくゑてをくくゑををうる　乙ちられうをの乙を
てやをくたちやをくく心うをいうるを母うんまあつを
みいを乙舟ををうくくはををるうをめんをれををうめく

ろへとうとうとおもひくくうわつくみは幸ひうさ
そうしたうをのこ乃言乃人をもひてうるさに心ほそくも
つとるとこつりこくをみくあられてはやうをなう
ものあるとしたる心ゝ行へしたうしくにあはとめしそ
あはくひ行へ　つりあとにあるくとをとるも
此家をしたる事とハ乃こたう
このゐんつるるしつひとをそはをつとうしろあさ
くれとうしこにをたちはういとくろれと
行なをてくるかねのあつうひとうをまさるも
はてこひいをおてをろ心うを海あくいとるま
をとをえんをれかくいて心うくこのんをうしく
海まをれをもあるををうと
くをうくうくをとのうそくるれとも

ををたをこをつをれとのうれをはうをこをうく
てはをくくかんをた　活舟乃すひかねたりつ
らくをうをてお将のるすんいをぬも
ゐのをつはあくいとくんをるくんをしまはりくれ
ものはくくしてくれをわるくくしるのををひうはるま
しとをとこひるはやうにたうちくあくをいうをん
ゆれとををうちうををたるを海んをとこひくれと
くにゐはくる　白をゐのはけはをんをはるも
あるうをくゐはとあるやををはるふんをるも
をうはうをこなをにわるはくるとて把もをのをくをうを
わやゐるくくをたうにいまやうをれうらあをと
をををうるはををてをれくくにやんをいんる
とをてゐるをとをひくうにやをとををいとををあ

おもてをふくめ　　よくかんてさるも
ひとめいとまるさめるうにるみ四もなれけるよ
てそひみてるるとそやのうへのあるひそあくやそ
はとものこひいつまそはにわれさあそもやとみも
とひそうへぬけをるあなけまと自えの中れ
えりこひそうそれそうちわれのさあそもやと也
おなるそうにはるとひきそうれてうちうをそ
あるいとかるやに自ひるくへとうをにもかく
ぬとうれえるうしいとかれるるをうとうあうし
もてふとよ　　ものそれそえのは仏のるるやと
をやはれえのそきれるをとにあるるくもみ仏
いてはるをひるをんあるるえそはるるのいて

えんなを除てそ一日ゆりてひてほとなるとうそ
えあるそうをるりみるとそうにわるさと えのうち
もるるるしとるうれへそうにかをあるるうう
もやてるまるをうそうそうみるうと　えのをそ
　　ゆるしとも
うはるうんるるをにわるを地獄とをるる斗もとけるゆか
いてやのををれ狂とをへそををそにはいてをそしそ
いてそこそれうやうになにるいひわるるをとはるやう
あるをといとゆるるけなるるさ海をさはるにをそそね
をいるるるをとそうるに　　ゆるれやうみけをすに
なるるるるるはるに えるを後るけたるとも
えあゆひて小鹿るへをを来るあるるるる家にうるト家そ
海毎毎小鹿るを代海毎毎小鹿るをを代海毎毎

うつるよもすがらとものうれしかるものゆへ
うつりうつりとたるをやも　元　浮舟と物をお将
よやくくきるとてもられあるひをらくく
きるるものうるものゝ家うつりゆゝ卜系そやもあ
つも　又うき舟れくとつひくくこれ迷ゐ地
ととをや　細　嘉ゆれとなつるものにもれうト
美のつてうろつそやも　野ゐ面白
やあるにいとわくゆゆゆきて　おゐ舟といとゆ
くくひくくをくたるや
京城ゆれ小船うもくきゆゆを八嘉ゝとをはそゆ
かゐ八の京ろのよゝと浮舟ゝとうりゆくゝ八嘉ゝをん
とるくまくゝゆゝとゝとゝやくくにゆゆ
つてみるくゝゆゆくゝゆゝをゆくゆゆんとつひたるゝゝゆの

ゆくゝとやくくるたゆゆゝとゝるゝゆくゝてんとひゝ
くくとのくゝひゆゝるくるゝひなくゝたゐるゝのくゆゆさ
ゆるくくるくくこひくゝゆゆるゆくみゆるゆくゝゆゆた
くくやるんゆゆくくく

さうのあるこんくれあのとたくゆうとてなうめのこ者
ら也て　おねつるゆ　又はかねとゆうもこあ
てあつうんそこんくつ　つもるゆ　又是つ法
きゆ〜うかとあくこさんとけつううきあを心ゆ
くけてこひねうんかんくつるゆ　又つくう
ようれあの心ゆとくけてねたつめくさるゆ
あくさんとハ白れるゆ
とやうく屋とよねつようんつうきまるとこふて
くるにいとうくやんとまれはれほとけこて
ゆ〜只者う行へらんくを　是の世二文かたるゆ
心とこくあのあ〜にいたうとあてうくんとこく
めたくん　とか一ほとくきてあのあうくぬくる
らてハけとくめたつくゆ

よのくつ有様と只愛ゆ　世界つくゆ
おつとこくけてなるこるにこさうひて
くちも心も有へさ物ゆ　人のくつお
うまくとゆ後さ上薦しさハくつそれを
心とあれものあ所とゆ
わつくゆとかくにけるみくくきやこあるかね
とけ者のくちゆ又ゆれ物りこくも文ゆ只くくを
ゆうしくいとくちわくくにとくくゆ
我同ゆあれとも八文のくゆ法ゆ心くくた
かねとゆ者の間ゆくく八文ゆやうゆれとゆて
こひくくゆれを口悟とゆ
きくたいのくくゆもをめとえゆうたくくんの
ゆ先くくゆもくくくくゆきくるくき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとしたれて
うきせをあはうぬをとめてと天ぐちうとみてしをる
母あるこゝろやうすう水ゐ春とを浮舟とをうる
てなさこゝやとや
ゆくすゑとくゝさるゆとをひろうてゐん
母の心はこゝとをのまゝにあるをとなれく
とをうををとをれをとをうをとをの心也
少をとの人をうれをとを侍をこゝの姫をうゆゐをる
らひゐゝをとをれを祈をゐくゐ地をせを義をの
こゝ侍をを行をれハうちれをたゝゆゐるをてけをゆ
侍をうをうくゝ侍をゝまゝたうゐをうを行をを
四をうをに山のを系ををゆゝうゐゆをうちゝ
をん侍をうをゝをいををれくゝうゆをうゐゝたう

ひゝいをををををををたちを行をうしを
をうををををひをうをに侍をを立をゝう考ゝ行てを
ゆをうをくゝ侍ををを口行ゝゐまて常ゐををなゐの行
山　ゐ宮のゐをゝゐましをんてんゆをうをを
行をゐ也
ゐををゝ口ををゝひをてをたうををゐくゝをうを
ゆをうををゆをゝくをまゆをに和ををひをうをゐゝをを
ゝをゐゝ侍ゐのゐゝゝしをゐををハを行
空れ侍行侍ゐゝにををゝゐなををを行ゝ
八ゐをの清行ゐれをゐゐく彼ハ寺ゐ具ゐ
ゆゝををたゐ也
山里ゆをたゐををををゝにををを行てを
うををををれいをををゝゆくゝをををゝ

まれたりやとあのほうとなん思えるあれひくさま
ものとたくまん　八文字屋本
あるとき八さとちかくとめあるもくゆきとるあさ
ものすゝ山里めさたくもさられと部の書作のやう
なるも
後ていぬはるるよあとうなれ人の面影をとにとくめたりえん
恋八の京師一元の面影をとにあとうとくあるも
うれ拍住しゝ人をうつろひ前と言るようまるに
はあのゝ後をとを古を跡をねるめさゝ後も
なるとのゝひつゝ弁れあるゝ元のうゝたちるうと
後へきをいとうれゝと乃京まうにゝひそゝに心
うけゝにうそめふれるくをゝられのはゝひさるを
て拍後しゝ後ゝ九性よりくるうくゆるうとれはて
ようのんを　うさ舟ろもも

さいろうろやはと雪ゝとさをうにうあくゝくく
拍はゝてゝそとはきるゝねな紙をゝうはゝ人
をて後へとの後へをはひれ無れゝ後りさつ
そうゝとてうゝにるん有くうを行ゝうこのちもあ
やゝさこ部ようくろ人拍ゝ後あるといと心をるく
をゝゝちうさ後ゝまるうゝそにもはゝゝあ
ゝあをうろ人さとあゝゝきゝみちにそをやをく
をそありひたゝてゝんと後ゝと雪のくゝれく
後をろゝくをゝるゝみちるゝろゝそありるくゝるを
きるゝふをろとれ雪ろにうとあるゝハ後よるんとて
きいの後ゝゝ後ゝろゝたゝそのんゝをゝゝん有ゝせ
ゝをゝゝ後ゝ　あやゝゝきに部をゝひれハをゝ心
あゝゝんをゝろ人書作後ゝと弁るの後ゝを

みつくやハうこにあてゝ[illegible]のあくを[illegible]
とはゝ人ゆゝしるハやを〳〵とゝ〳〵に京と[illegible]
むとをゝのうをてゝ[illegible]ぬとゝゆゝ
ゆゝてうゝもくゝとゝ人のゆゝてゝとゝてゝ[illegible]
これひゝとをに付てゝ[illegible]ハ出をやゝ[illegible]
あゝれちゝひとやゝうてゝ人の祈ゝひとゝ[illegible]ゝこ
そゝをゝうゝあゝとゝのゝ[illegible]
よゝうゝとゝたゝゝ[illegible]ゝ利生ゝ[illegible]
ゝと心ゝ人〳〵

わゝゝのゝゝゝに　掃部頭紀伊守殿御
たゝ山ゝ尾ゝ[illegible]十二年ゝ[illegible]
伝説の帝ゝ[illegible]行て内侍ゝ十禅師
ゝ補ゝ[illegible]ゝ[illegible]

人ゝ[illegible]
まゝてゝれとゝ[illegible]
人ゝ[illegible]ゝと云ゝ[illegible]内の[illegible]一[illegible]生ゝ[illegible]
度ゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]

てはうしをはりうぬ　あつるくハ　云奥も
の儀さ心やうけ物のあきつるれとも心さう
ちうに行ふて　年元まわり　白とゆく幼くへ
ゆえあるとと月を内給行へ　蓮ちうに
うき舟へ又とやうはうとも
ありうくんうくひのやうにうくあ
らんを　我人はうひのやうにいちうちうとも
とちうにいうたうあややはきくくあんと宮
花為春表紙云東都云花見ぶ
一生をうめひうとある中にはうたうめとろる
人のよめる又あうちうの物いうとあううか
為東元あうとうくそうめよこのうとまれす
ちうとうるうくハうひのほううひふうう月

つうくたうめハうひのほううひいとうそまう
とうあうと云物終あをはううそうめとて人の花
四月うううみて葉ふうう梅みを月うあうくしふよ
ちうるみや　花る　又云伊賀伊勢とうさう中
うちうとたうめとうう平野社東社りたうあ
乃社とも八孤や千とうくも孤の人とたうたうと
をに中うちうてんとうう孤るうや
又をやもうるくうう紙人のあうひうてある物うれた
たう物ハ記ううのうれひをめとうんううるうと
をうるうてんとやうそれうんのあ　常陸うるあ
いとあうくくしをなあうとの物くううううひく
いとゆうとうとみうくううれて物うううされあう
くうう花とうを物給ひうくあるを清う

ひせさを引て　女二宮は蓋の方をせさる人さとも
ひあるこもあらぬへそれとうこまりとさあら
拍子ていうこもあれ中のこ引そあある
女二宮ひるこもて行りまをやうこけう
してうこまりとさ引るもみく蓋弧引るも
うちまる　内裏すりのるも
たくあややうさて入谷の宮あとやこの人こ
内裏ハ蓋ものをみ引こうこやうれと親のやうに
しかりやえ子人のあややれやうに内裏れ引あよ
て女二宮れ引るもとを女三宮人中引とを引
いと面んとるれこうこ限るくこひやうこ引こう
内裏ものと入谷の宮あとくまて引あもと引女二宮
とやむことるく蓋の宮ひ引るもハ限るれとも

こなさうれるさやうつき中こ引宮ほ人ようつく
ひつくきうこうこんのうこひあるとうこ引こう
あるとの引こ　こなさうあるさやうつるやう
こ引宮ほ人をハ女三宮内裏あとの宮ほう
一つるあ人へひつくきうこくしんのうこひある
とハほ舟つるも
きうほとあて　河さほ引こやう紙束有られ
五月の事也
ひつきうくあほをとらうれきうこひひるとうかし
らあうこうひほくるとひうくつうこ引れあ引の中
ものうあ人ひつはをまとの引ものうあ人をいつくの
引つうこれこいとほくきうくうこうれとうち事さ
うほくうひくのうあ
年ゝ車に高くるも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のあけうれるのつとせさ殆ゑれもとうちにあき
つ出さり面をうしおうそくをに風さいとひやくに吹
ふうひしらをうりうりくれうう雨ちと泊と
く四うなめれしぬへきはあをひわりゑれいう
いとをくあやしうにやうさうひあるはほとをれく
んさうあくふれ面るすうあんとつひあつう
紙なうるのあく雨をさとをくくくもとのうるく
しさに何うとうひあんあうも
ゑれにはあく　蓮の羽也
月はうひ修うるのとやのうさやんやてすんとふをを殆
つういうにやゆつさうにうとえハうるーをにうひてゐ
行つをもゆれとえんく彩うるとてうあつ十ーあ
らんとたちあくーやをうくーをうう殆をんは夜う

ゑうくちんと思ひくゆのうめちう紀殆るれをを
いよ　　ひうちうもとうるも　花二条院中宮殆也
うあくくーをあとてうさいあくんまう紀はうち殆
ゆのう殆うんハあうくうもうのうをうんをもあくぬと
殆夜よやうをうをなれとも也わうあはうち殆ゆのう殆
うん　うん殆ゆうをうをうをうをうをうをうをうをうを
あやーうをうんのうを殆あうあうをうをうをうをうを
をんのゆうーなくてうをちうを殆つあをいつ殆面や
やあうりうれをを面をいをうをうし夜井くのあやーき
うをーうある殆行うちうくて　殆四うれるも
やうつをりれをうのをいをあやうーうれくつ乃淋
車ひうくハ殆ゆいをて見うをあーてようを殆くのを
をくうてハ殆をうるて殆をうあうをうをうをうをうく

もゝくるとさくあくもたねやもちゝゆ　　あの辰巳
南と云るゆ　あの拓と云時あくとやうやそよめう
さのくわくうとにあくもあくたくにあとにさくひくさ
とひそ所すのこれもくはくんにあるくう
くるくもうくあ所あうこすくあくうくあくんくるのくん
所くあるくあやあくあまくあくるあくんくれれ
さくくくもくあくあくあくくく

うゑ初めとあはまさるものなく
しゐひそんいもと孫ひぬうのへうの乃孫ひもの孫さて
そくはなくなれ初めのさ後ちみまるとさ海不
ゑまつまとしるへさあやあしんはやまさまてて
とひ使ゆるとまくさ孫へうさ
そそ孫へうるさ有へさ奏みやあしんさろ
よゑまつさうあやしまさまてこてそうくひ
孫へさとも仏さとあ孫へさとまさ書たる者よ対
やぬまのうう孫あるうれんまてもちれとま
まう推さまして出る猿やさ後うりて面白
しへ孫乃すも家あくはもの孫りまし知る
人の推され猿まさ出るとうもひとの推さみて云
あいうるまうへうへ人の対あくはん孫乃るもの孫

ひてくやさうくうる孫
人乃ちまりとらうそまに初ほうれそ乃初ほうと
もさほいとはそまとおほまほうほうもなうあを
ぬる心ちまるに名るあとはいなておほちちれまま
ぬれあるうそて
るはまて初ほそれたる
こまてものうれものうまるみやさ三象の象
のまうちうさ神也
いうふとうやのもまうぬのうとてうちれまてゆく
あとまさ我さ学あり
うやうの孫ほうまに乃まれ
乃やうちるそうまやさ乃孫へうまの乃初に
孫ちる初乃へ孫へうもいおの孫れ猿れ名るもの乃初に
と有初へ孫有へうもとやさ猿れ名りまけ

うぶやまのまろうひ行つゐ心ちもおろく
とをさろう　河海花をに多くみとうとをもたくよ
もろふ流れ生ゐをとく云詠歌よ移ろつるゝと心
はへしとも車につゐてよりをくれたるゝ河海花を
すあり　遠乃丸移　花を流れ落遠と車
乃心よりうをうをうを車れ中に移ろると云へさに
やはとも遠八東屋ゐて八車より始りて女房と
うをうをひあるうへ車をとをうをふ引入るゝよりたこ
ゝれて車をうをうを丸寝をうをとを乃ゝ行ゝ遠
をうをうを者ゝ行るに上の須り板のやうをそ
いと清をうをゝあて遠の者もいつゐを心ちもを
行とあり三ゝ八遠八たくよもをうをの宿れ分り
てをそあゝゐ遠ゝあるゝ一宿をるゝを遠の丸

移といをんをうをひ行ろまゝをふをうひ行ろまゝをや
とゐ井人をもいつあをていつるとをたをのくうをてゐ
ゝあをとをるゝ代安行ひをくゝゐゐてをうれはまを
ようをを移移ゐ　いつるをのもいろ移行ゝをる
ものあをとゐをゝ人をゝをもをうをもをも
うををいをゝ代ての移移ひ川淵もくあやゝいろをる
きをゝ代をひをををゝて九月ゐを有ろるを心うろ
ををやゐうゐをいつるをのをそゐををゝ八尼元もいをく
移ゝをををひのかなゐをるゐをとをれとをのをゝゐ
ゐ月やうゐをんうをゐあたうをゐをひをそをなう月ゐあを
をを移ちゐをやのゝをとゐひをなくをむ
ををを十三日を八十三日を八月乃ゐゐあく十四
ゐをを九月代移ゐを人をををのあり

[illegible]十三日なりとそうあるえこそ八まつ〜〜
今夜八時ばかりと云ふ
宮のうへにそうそうめさんことも有るあつひてゆきうを
つまはんをいとうそうそうてかんやゆめとまるこそふ
このことをそうをなんもむそうつかをはかりひ
てそれいのちあるもはゆそうはひてんうこうも
そうつへうてハそうつきちれ所をとせめての行つへ人
ひとりをやはつへうさとの行へそこれ所りそひるはは
とのりぬめれやを尼所乃ちもうつ〜そうハあるも
とそれていとあやつよゆちてゆそうもちれを
あやとそうへそうはへありちはるなをとうあをひ
そうつへき心まうをしはへつをりはうはゆ
そう寺れわるをあり〜まはり　花　真信ゑ建

立しはへり
船をのりてぬるうれ人をつをはのうれ乃をうて光
てやのしあをしはへはすうひまるのはゆまをさも
ははをしを　蓮をとんをまて芝牛れつをまをさもか
かをはをはへはめて芝ゆるやうれ舟の所ちをん
ちはへはやも
ちつくてかはつるのはをてうんすつくある
所をつをと流やうをはをはをとをてうれはは
と石をうれはるをとをうをはうをはをてうれはや
をう　乃ちうれ所あハあるなををとをてうれ行や
うをを物のはをなう紙車れ中に引をうて乃をはを
をやうはへつてある物りはうをん　車を物を引
ををうをををあうをを平花りあを
尼所をいをうをををはゆうはにつをて

うとゝ和てゝてゝあれとも和りにさやうるれたあま
ひとくんちよるくんやあくとなれ心や
こひめえんのはゝとゝもみゝそうやうあくゝもんをうつへうう
しうえゝゝまとゝこひうをぬるすゝとゝをんるれとうるゝ
うあはゝくゝくむとゝをれとうちむそうゝくゝをはる
はハゝとあゝゝ色ゝのもゝゝゝゝみあくちゝとはてのひとそ
ひくゝるゝとゝそゝにゝゝよゝるゝゝやゝくゝやめなるゝそあゝくれ
うにゝゝゝあゝひゝあゝるゝものハをゝゝろゝは海ゝるゝはるゝゝのそ
とゝあゝゝそゝにゝうゝあゝるゝゝみゝうゝけゝひと　いゝあゝゝゝく
ゝゝひゝゝゝとゝゝゝるゝゝゝゝのゝゝ海ゝうゝゝあなゝ海ゝと海ゝを
ゝをゝゝゝゝひゝめゝゝゝるゝゝゝゝ

[illegible]

年むまれ　元車[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四ちのあやまちにはつてこうるくとそひ行くへ出てる
んくるあるとちてけてゆくしくゆるへさあとちくるあは
を昨夜あるとゆすくるまちちをたるは有極今もこし
わくるて　蓮乃ゆ
いとはつたるもそくくそれとまてうくをくくもあ
らてあはつりはあの乃うくあくくあとをくはくはそひ
てくうきねたまとすくくゆるたくひあるくくもうち
きくつてて　法華のまり蓮乃入ゆをを所うき
舟をつくれとまてうくをくくくもわくてあはつう
むういとまくくをたるくはをくれあるあにあるのし
うくくのをひはくまてうくをのもてれはくをさるとハ
うあくくとはてるり　婦人乃郷や
宮の法華くれ見くくめてたまあるをあるまくう

くうをあはつりはくはくふまてあくてあくあ
んとをくくむをくくはあはくくをふて後えをむくを
をんくをとをくくをんなくくはくくてくれうをあ
はくはくくはくくはくはくは

[illegible]

[illegible]

[illegible]

してこれをつ
かつまことくふつそ
やまとことはさんまはなれるまれとも元ハや
ふと琴のるゆゆとさわ〳〵もとあとさんうひく〳〵く
もとまるゆ頃とに管絃ハまりてとと云也師説
くのこと
いとうとうとにんとくれたりとハ乃こと　浦あれお
つるとゆとゆの行てさのこんとくまてうあとハこうひ行
ゆるかゆ也
こうにとうきてもこつまくにもこ乃〳〵んちとゆあ乃
うあ屋まうゆ行さハるのめにあなさぬるるへ〳〵とと
とゆやうて楚まれたいうへのこあのきんれたと
そんゆ行つるも　詩河海まあり此詩ハ浦舟のころ

こさわつるさをまきさうたるうりゆ〳〵出〳〵行ゆ也
班女閨中秋扇文楚王臺上夜琴哀
行弓とのこひ〳〵行うゆにあ〳〵ひ〳〵いてめてたく〳〵ゆ
うるうと行浪をゆあるうあ　弓あとうるゆと
のくゆたなまて行あるゆたて行あるたにめてたく
たふやうたちやそてうこうさ舟ゆはまたる行浪さ
さあるゆる也此行ハ古れ行たるを楚ゆとゆし
行と行浪たうめをくうもうと
わつされあもんとさつへなれやのつめ〳〵とたたゆね
そひとへよめてゆものうそとくゆたるなあれう〳〵
まゆの河也此行ハ新お行ゆそうあ西とハたて
ひとへうめてたうとゆてうとあつされあと乃
をまゆてさ国のつめ〳〵とたたゆねてとハうもう

ゆふんとくまたるふやうにてとうやうれるすまてねたん
ちくきたるるや
花は班女う秋の扇ちは捨られあるるとは思へ
ことはまして芸は琴のことはのこめてたるるや
事こてはあやしくもひはるれとは思
蓮のとひあらくはなを捨梅や
尼元のうくるるとうはるまるにおるつる
ちとはるとたるまてゆんちまをてまてまて
あるくにあるてうにたるるのあるはるはとんん
ゆまとめるくめはるはとにるるはるるにそんくを
為　たるうるるるはるめてんはるはとく
うはるんくとんるやうはんくるるのはるや
やるるとるんくんるるめるれるはるるてをるはん

完はおれまくに　やとうさやとるつてをいまれすと
乃様のをいつふるしくまるやを接たるるるを
くくに思ひ出りて心るるとはるるるとはるるとはん
月は苦るるるくくはをるたるととれ神を引あるや
て居元はるめる
やるるめるるるるたるるるくくく

ゐるとや　蓋のうへや
わさとうゑてのちの行末はたんぱくん寺
とゝ